

日本老年社会科学会
自主企画フォーラム
2015. 6. 14
パシフィコ横浜

コミュニティにおける アクションリサーチとは何か

冷水 豊
日本福祉大学
研究フェロー

アクションリサーチの研究目的

- アクションリサーチ（以下AR）は、これまで教育、看護、経営などの分野において多様な視点・方法で取り組まれてきた。
- ここでは、**高齢社会におけるコミュニティに焦点**を当てている。
- そこで研究目的は、**高齢社会における特定のコミュニティが抱える課題の解決策を見出すこと**。
E・T・ストリンガー（2012）「普遍的な説明を求める実験的・科学的研究とは違い、特定の状況とその場に応じた解決に焦点を合わせる」
- このため、**高齢社会のあり方についてのコミュニティ・レベルでの一定の価値判断を伴うことに留意**（Herr & Anderson, 2005）。
Cf. 一般に実証・実験科学は、価値判断を排除。
- しかし研究である以上、**科学的研究法として従来型研究法の活用とARに独自の科学的方法の開発が必要**。（後述）

アクションリサーチの担い手と研究運営

- コミュニティを基盤にしたARは、全てのステークホルダー、すなわち研究する課題から影響を受ける（及ぼす）すべての人々が、研究プロセスに参加する。（E・T・ストリンガー, 2012）
- ステークホルダーには、研究者のほかに、住民、自治体、保健医療・福祉関係の機関・施設・団体、地元企業などが含まれる。
- ステークホルダーは、相互に教え教えられる関係でお互いの立場や考え方の違いを尊重しあって協働的に研究を運営。
(Herr & Anderson, 2005)
Cf. 実証・実験研究では、研究の主体は研究者で、ステークホルダーは、研究者がデータや情報を収集する対象または協力者。
- 各ステークホルダーの特徴に即した役割分担が重要。
 - ・ コミュニティでのARでは、とくに住民と自治体の役割が重要。
 - ・ 研究者の役割：相応しい科学的方法の提案・適用と広範な情報の収集・伝達。ステークホルダー間のコミュニケーションの調整。

3

アクションリサーチの研究プロセス

図1 参照

- 次の4段階で捉える。（PDCAサイクルを修正）
 - ① 特定コミュニティで解決を要する課題の発見と分析
 - ② 解決のための方策の計画と体制づくり
 - ③ 計画に即した解決策の実行（アクション）
 - ④ 解決策実行の過程と結果の評価
 - ・ 第1のサイクルの①～④の研究プロセスを、次のサイクルの①以降へスパイラルに循環する積み重ね。
 - ・ ①～④の各段階は、ある段階で前の段階に戻って研究の遂行を修正変更することもある。例) ③実行の段階で、②計画・体制作りへ戻る
Cf. 実証・実験研究：仮説や研究方法の研究途中での変更はあり得ない。
- 研究成果の他のコミュニティへの波及のための諸要件の設定
 - ・ 4段階の研究プロセスとは別。
 - ・ 研究の各過程と結果の詳細な説明に基づき波及可能な諸要件を示す。
 - ・ 波及要件は各サイクルの研究プロセスのどの段階からも引き出せる。
 - ・ その積み上げ⇒質的研究としてのARの結果の一般化へ。

4

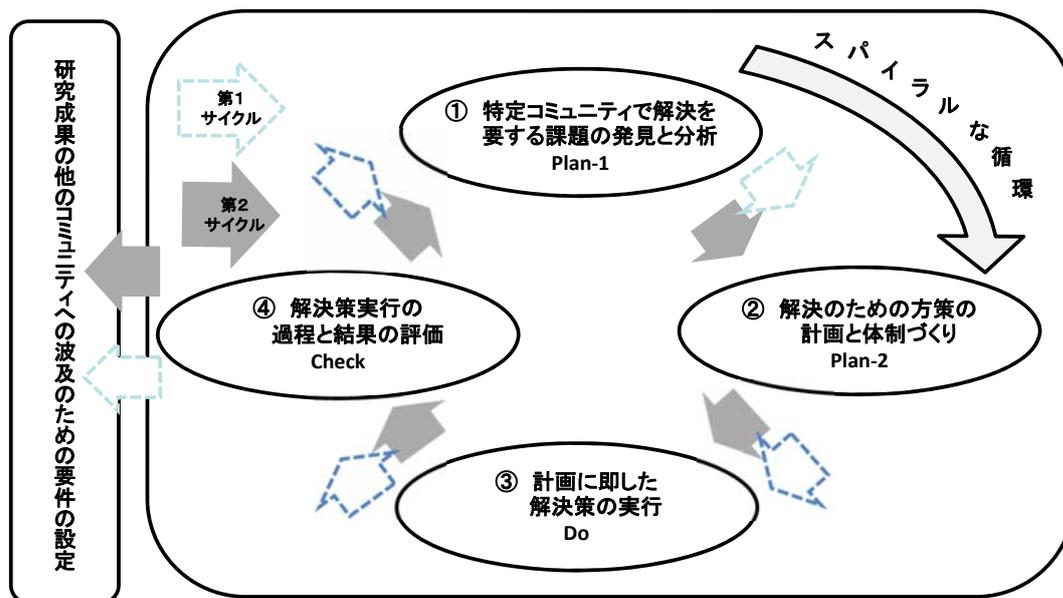


図1 コミュニティにおけるアクションリサーチの研究プロセス
作成: 社会技術研究開発研究センター 長島洋介

研究プロセスの具体例

「セカンドライフの就労モデル開発研究」(代表 辻哲夫・東大高齢社会総合研究機構)

社会技術研究開発センター (RISTEX) の研究開発領域「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」におけるプロジェクトの一つ

- プロセス① 特定コミュニティで解決を要する課題の発見と分析
大都市近郊の千葉県柏市豊四季団地および周辺地域で定年退職後の生きがい就労を生み出す。
- プロセス② 解決のための方策の計画と体制づくり
柏市役所(官), 都市再生機構(産), 地域住民(民)と協働して全体事業統括組織(「中間支援組織」)を作って計画と運営。
- プロセス③ 計画に即した解決策の実行(アクション)
7事業から始めてその後9事業の生きがい就労事業を創生した。
- プロセス④ 解決策実行の過程と効果の評価
 - ・プロセス/手段の成果: 事業を推進するエンジン「中間支援組織」
 - ・効果(アウトプット): 3年の研究期間中に、4領域6事業の生きがい就労事業に合計174名の就労を実現。
- 研究成果の他のコミュニティへの波及のための要件の設定
 - ・「中間支援組織」運営のための『高齢者就労マニュアル』
 - ・就労事業とセカンドライフのための地域勉強会の継続(訪問・視察多い)

アクションリサーチの研究方法

□ 従来型研究方法の活用

従来型の量的・質的研究法を対立的より補完的に活用する必要。

例) 研究プロセス①「特定コミュニティで解決を要する課題の発見と分析」における量的調査法や事例分析法

研究プロセス④「解決策実行の過程と結果の評価」における個人の人々の心身機能や活動の向上等を評価する統計解析法(困難も)

□ ARに独自の研究方法

研究プロセスの段階に即した観察・記録・評価などの質的研究法が基本。

例) 研究プロセス②③での、ステークホルダーによる解決策の計画と実行のための協働(関係作り・組織化)を観察・記録する方法

研究プロセス④での、課題解決に向けた「コミュニティの変化」を評価する方法

□ ARに独自の研究方法における信頼性と妥当性

Lincoln & Guba (1985) : trustworthiness (信憑性) の4基準

①波及可能性 (transferability) ②信用性 (credibility)

③頼れる一貫性 (dependability) ④確証性 (confirmability)

Herr & Anderson (2005) : validity の4基準

①アウトカム妥当性 ②プロセス妥当性 ③民主的妥当性 ④触媒的妥当性 7